特別記事：平成二九年度慶應法学会シンポジウム

大阪と実学

解題　大阪および実学ならびに慶應義塾

法学部教授　宮岡　勲

慶應法学会の平成二九年度春季研究大会は、「大阪と実学」というテーマの下、七月一日（土）、近畿大学東大阪キャンパス（大阪府東大阪市）にて行われた。この大会テーマは、大会開催校として先に決定されていた近畿大学の所在地と理念であること、また、福澤諭吉ゆかりの地と慶應義塾の建学精神でもあること、それに法学と政治学の共通テーマになりうることから決定されたものである。

本シンポジウムでは、岩谷十郎・慶應義塾大学法学部長による開会の辞に続き、まず、三者三様の刺激的な個別報告が行われた。報告者は、世耕石弘・近畿大学総務部長、大屋雄裕・慶應義塾大学法学部教授、および柏原宏紀・関西大学経済学部准教授の三名である。以下、これらの報告の骨子と全体的な印象だけを述べておく。いずれも興味深い報告ばかりなので、ぜひ本号に掲載された各論考を一読することをお勧めする。

①世耕報告「近大的『大阪と実学』コミュニケーション戦略」

広報のプロである世耕氏からは、大阪という所在地と実学教育という建学精神を強調する、近畿大学のコミュニケーション戦略について報告がなされた。近大の実学とは、「それまでにない独創的な研究に挑むこと」と「その研究成果を社会に活かし、しか

も収益をあげること」を特徴とするものであり、クロマグロの養殖に関する研究がそのよい例であるという。実際の大学広告の写真を含むパワーポイントのスライドを使った軽妙な報告であった。

②大屋報告「実学・法学・時間・距離――科学としての法学とその条件」

法哲学を専攻する大屋会員は、福澤諭吉の著作から実学の意義を科学と捉えて、科学としての法学について考察するとともに、東京と大阪の間の距離と時間的差異から「実学と大阪」の関係を論じた。法の科学的研究・実践の一例として、大阪中之島にある法務省法務総合研究所が行っている法整備支援を議論の俎上に載せたことがとても印象深かった。すぐにでも出版できる、入念に準備されたペーパーに基づく重厚な報告であった。

③柏原報告「長州五傑と明治維新――『大阪と実学』に注目して」

日本経済史、日本政治史・行政史を専門とする柏原・新会員は、明治維新期における長州五傑の活躍を「大阪と実学」の観点から分析した。実学については、伊藤博文や井上馨などの長州五傑が密航したイギリスで学んだ西洋事情や、英語、西洋の理系知識・技術に着目した。また、実践の場としての「大阪」としては、開港場兵庫、造幣局、および鉄道建設を取り上げた。当時の写真を含むパワーポイントのスライドを使った、わかりやすく興味深い報告であった。

次の討論の時間では、報告者の三名をパネリストとして、個別報告を踏まえたディスカッションと活発な質疑応答が行われた。ディスカッションでは、なぜ大阪で実学が重視されるのかについて、各報告者の意見をまとめてもらった。また、会場の出席者から質問が多く出されるであろうことを予想して、司会者のコメントは極力抑えて、質疑応答の時間をできるだけとるようにした。結果として、その判断は間違っていなかったと自負している。

司会者として強く感じたことは、大阪と実学との間のみならず、それらと慶應義塾との間の深い関係である。大屋会員も指摘していたとおり、福澤のいう科学としての実学とは、「大阪という町人社会を背景とした、政治とかかわらない自由な蘭学の伝統」[1]と深い関

係があろう。その伝統の形成に深く関わったのが緒方洪庵の適塾であった。そして、この適塾で学んだ福澤を通じて、大阪の実学主義は、慶應義塾へもしっかりと引き継がれているのではないか。適塾の後身である大阪大学から、その「兄弟みたいなもの」[2]である慶應義塾大学に移ってきた筆者には、そう思われて仕方がないのである。

今回のシンポジウム開催にあたっては、多くの方々にご協力いただいた。末筆ながら、大会実行委員長としてご尽力くださった近畿大学の諏訪野大教授をはじめ、しっかりとした準備のうえで内容の濃いお話をしていただいた各報告者、会場へご足労いただいた会員、および慶應法学会事務局のみなさまに対し、心よりお礼を申し上げる。

（1）森田康夫『福沢諭吉と大坂』和泉書院、一九九六年、一二〇頁。

（2）宮本又郎ほか『異端がひらく未来――大阪近代化の幕開けと福澤諭吉』慶應義塾、二〇〇九年、七三頁。